

「私の望む未来

人権への考え」

高石市立取石中学校 三年

吉岡 よしおか

実紅 みく

ふだん、人権としてとらえて深く考えるというより、人への思いやりとして考えさせられる事があります。あるショッピングモールのフードコート内での出来事です。ある男性が、注文したうどんをトレーに乗せ、その方の座るテーブルまで、いまにもひっくり返しそうになりながらも、なんとか運び切ったのを、私は、ほっとして見ていました。男性が嬉しそうに割りばしを口で割って、うどんをおいしそうに食べ始められたのを見て、私は、一緒に来ていた母に、

「うどん、おいしそう。今度食べようかな。」
と言うと、母も嬉しそうに笑っていました。

すると、近くから大きな笑い声が聞こえてきました。どうやら、先ほどの男性の食事の様子を見て、

侮辱しているようでした。男性はうどんをすすめるにも困難で、一度では吸い上げられず、何度もすすって食事をされていました。時には強く吸い過ぎて鼻に入ってしまった、むせたり、うどんがテーブルへと落ちてしまい、手でつかんで、口へ運んだりしていましたが、その笑っている人達に迷惑をかけているわけではありません。私は、とても悔しくて、その人達を強く見ました。その時、母が小さな声で優しく、

「人を侮辱する人達に、何を言っても無駄。そっと守ってあげよう。」

と言いながら、その男性とその笑っている人達の間立って、メニューを見ている振りをしながら、私の名前を呼びました。母が何をしたいのかが分かったので、隣へ移動しました。母は、そのうち何も言わずに、騒いでいる人達を見つめました。その人達は母の様子に気付いて気まぎれになり、その場からいなくなりました。しばらくすると、男性も食事を終え、いなくなりました。母は、私に何も言いませんでした。この時、私は小学校低学年でしたが、今でもその事を強く覚えています。小さな私には、

大きなお兄さん達に真正面から立ち向かう事はできなくても、自分の中ですが、できる限りのことはできたのではないかと思います。食事をしている男性が少しでも不快な思いが減り、私達にも迷惑をかけたなどという気遣いをしなくてもすむような対応を母は教えてくれたのだと思います。いじめや差別について社会で取り上げられていますが、皆が優しい気持ちを持って、考えて行動していけば、良くなっていくと思います。私は、とても小さな頃から、人への思いやりや人に対してどんな態度をとったら不快に感じさせるか、ということを教えられてきました。私も子どもを持つたら、大切なこととして、しっかりと教えていきたいです。

今、偏見の目を持った人達を変えることはとても難しいけれど、いつの日か差別やいじめをすることが、とても恥ずかしい行為として皆が意識できる世の中に変えていきたいです。だから、この意志を強く持ち続け、私達の子孫が住む世界を良くしていくために、一人でいる子がいたら声をかけたりなど、とても小さな事だけど、私にできる精一杯のことを行っていきます。